

### 【講演3】 中国における幼児教育の現状と課題

曹能秀（雲南師範大学）

（内田） それでは講演の3つ目、「中国における幼児教育の現状と課題」と題しまして、曹能秀先生からお話をいただきます。曹先生は雲南師範大学の教授でいらっしゃいます。現在子ども発達教育研究センターの客員研究員でいらっしゃいます。1964年に生まれ、北京師範大学にて教育学学士、華東師範大学にて教育学修士を取得、また『幼児数学教育』『外国児童心理発達と教育理論』など沢山の著書をお書きになっていらっしゃいます。現在、雲南師範大学教育科学管理学院教授、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センターの客員研究員として、中国及び日本の幼児教育についての研究活動を行っていらっしゃいます。それでは曹先生、お願いいたします。

（曹） ご紹介いただきました曹と申します。日本語は十分ではありませんので、よろしくお願いします。

中国の幼児教育の現状と課題について、まず概要と具体的な状況を、そして最後に課題ということで、順番に話していきたいと思っております。



1. 1985年から1995年の幼児教育。この本の中に中国の幼児教育と世界の幼児教育との比較が書いてありますが、その結果、世界の幼児教育は1985年から1995年の10年間の成長が速いことがわかります。中国でも、その10年間の成長は比較的速いものとなっています。全般的に見ると、中国は発展途上地域の中でも発展は比較的速い国家に属します。しかし中国の幼児教育は、発展地域の国家とある発展途上地域の国家を比較した場合、まだ遅れています。したがって、中国の幼児教育の成長速度は今より加速したほうがよいと私は考えています。

2. 1949年から2002年までの中国の幼児教育の発展状況。この本は2003年に出版された『百年の中国の幼児教育』というのですが、これは1903年から2003年までの中国の中国の幼児教育の歩みともいえます。その本の中の32ページに統計図があるのですが、その統計図を見てください。

1960年のところを見てください。これは一番ピークになっています。これはその時の毛沢東の大躍進の政策により無理やり沢山の幼稚園を作って、沢山の子どもたちをその中に入れたからです。でも、それはやはり不自然なことだったので、65年の時に元に戻して、自然に発展していきました。次は95年に2番目のピークになり、2000年には少し落ちてきましたが、また2001年から少し増えてきます。

この統計表の中に毎年の幼稚園の数と園児が書いてありますので、後でゆっくりご覧になってください。具体的な状況については、あくまでも自分の考えですが、全般的に見ていきたいと思っています。私は、政府の政策と学術研究と幼稚園等での実践の3つを見ていくと、中国の幼児教育が全般的にわかるのではないかと思います。

3つのものはある程度独立していますが、かなり共に影響し合っています。90年代以前は図のような関係になっていると、私は思っています。

つまり、中心は政府の政策で、学術研究や幼稚園の実践にかなりの影響がありました。学術研究は幼稚園の実践にかなり影響がありますが、政府の政策にはあまり影響がありませんでした。幼稚園などの実践が一番地位が低くて、あまり政府の政策と学術研究には影響がありませんでした。しかし90年代以降は、少し変わってきました。

というのは、その当時の政治、文化、経済の影響と世界の理論と実践の発展の最新成果の影響で、研究の地位が上がってきました。政策の影響も強いのですが、研究のほうが上がってきました。そして何より幼稚園等の実践が、政策や研究にも影響を与えるようになったということだと思います。

1. 学術研究。学術研究の内容は、下記のようになっています。特徴としては、3つ挙げられます。

1. 研究項目が広範、2. 研究内容にいくつかの注目すべき問題点を形成、3. 学術研究の連携体制が欠けている点です。

学術研究の影響はいろいろありますが、特に幼児教育の理論と実践には影響があります。個々に具体的に話していきたいと思います。

ここ20年の中国の学術研究の主要な側面は、西洋の理論を学習、解釈し、中国に応用するものと、中国の幼児教育に対する理論と実践に関する研究です。本当はこの2つは混ぜているんですけども、今は分かれているので、説明したいと思います。

どちらかというと、いま中国の学術研究はやはり1番のほうが強いのではないかと私は思っています。つまり、西洋の理論を中国に応用するほうが強いと思います。この西洋の理論というと、日本もかなり入っています。というのは、中国はよく西洋の資本主義国家とって、日本も入っているからです。

この本の274 ページに中国の研究者として、私の大学院の指導教官のハン先生と華東師範大学のり先生と私の写真を載せています。日本に来ていろいろな勉強をして、そういう写真も入っています。

中国の幼児教育に対する理論と実践に関する研究は、まだまだ十分ではないと私は考えています。ここで少し北京師範大学と華東師範大学と南京師範大学の研究特色をお話したいと思います。

中国の教育部に属する師範大学は4つあります。北京師範大学と南京師範大学と西南師範大学、これは重慶にある師範大学です。こは東北師範大学とって長春にあります。この師範大学はちなみに日本の教育が一番強い師範大学です。そして幼児教育の学術研究というと、この3つの師範大学がすごく強いと私は思っています。

北京師範大学は北京にあるので、かなり政府の影響が強い大学です。私はちょうど81年から85年の間、4年間北京師範大学にいましたが、85年以前は旧ソ連の影響を受けていたので、その時のテキストは半分以上ソ連のものでした。この本を編纂した中国学前教育研究会の今の理事長はロシアに留学したことがあって、ロシア語が堪能です。

華東師範大学の研究の特色というと、やはり西洋化だと思います。私は85年7月に卒業して9月に華東大学に入りましたが、入学してすぐにピアジェやP・S・ブルームなどの発達理論を勉強しました。そしてP・S・ブルームが編著した幼児教育の本を私も翻訳して出版しました。華東師範大学はかなり西洋のものの受け入れが速くて、すぐ翻訳して出版するという事です。

南京師範大学の特色は、実践ではないかだと思います。幼児教育の父といわれている先生がおり、この先生は南京にいらしたので、かなり南京師範大学の幼児教育に影響を与えました。

南京師範大学は実践を第一にしてきましたが、南京師範大学は別に教育部に属する師範大学ではなく、地方の大学です。でも、この3つの三角形の中でかけがえのない師範大学で、私は三足鼎立とも言えるのではないかと考えています。

2. 政府の方針・政策としては、3つ書いてあります。1. 幼児教育は重視されてきましたが、まだ十分ではありません。2. 価値観の変化。3つの方針・政策から見て、社会向きから個人向きへ変化しました。3. 政策の民主化、開放化。政策が徐々に民主化、開放化されています。

ここではこのうち2番目の価値観の変化について、少し具体的に話していきたいと思います。価値観の変化については、80年代から今まで最も重要な政策が3つあります。この3つのうち2番目のものは1981年に試行として、96年には正式なものになっています。これは「工作規程」という中国語をそのまま翻訳してきましたが、それは仕事の意味です。つまり、幼稚園の仕事に関する規定です。

価値観の変化を見ると、いろいろな面がわかると思いますが、私は具体的に幼児教育の任務から見ていきたいと思います。つまり、81年の時は幼児教育の任務として「全般的な発達」、「元気で活発な成長」、「入学前の基礎を築く」、「社会人としての基礎を築く」という4つがありますが、96年の時の政策には1番目の「全般的な発達」と2番目の「元気で活発な成長」は書かれていますが、3番目の「入学前の基礎を築く」と4番目の「社会人としての基礎を築く」は書かれていません。その代わりに、「ケアと教育の結合と親のための便宜を図る」が挙げられています。それは前より個人的な方面に注目しているからだと思います。

2001年は96年の政策方針に従って作られたものですが、人生の基礎を築くというものを強調しました。それは1人の子どもが幼稚園の中のことだけ、幼稚園と小学校のことだけではなく、1人子どもの人生全部を長い目で見ているからではないかと思っています。

3. 幼稚園等の幼児教育の実践。その前に中国の幼児教育の主な機関を3つ、説明したいと思います。

中国の幼児教育の主な機関は託児所、幼稚園と学前クラスです。託児所は0歳から3歳までの子どもを預ける場所です。幼稚園は3歳から就学前の子どもを預ける場所です。学前クラスは就学前1年だけ小学校にあるクラスです。多分1つの小学校には1つか2つの学前クラスがあります。中国の場合は託児所が少ないのです。中国には子どもを祖父母が面倒を見てくれる。あるいははお手伝いさんがうちに来て面倒を見てくれるという習慣があるので、あまり託児所には行きません。そういうこともあるので、今はだいたい3歳ではなく2歳半から、2歳から幼稚園に子どもを預けます。今、幼稚園と学前クラスのほうが多い。中国の2003年から2007年の中央政府の計画の中では、2007年までに幼稚園に全部の子どもの55%、学前クラスに全部の子どもの80%が入るように努力しています。主な機関以外にもまたいろいろなものがありますが、これはだいたい親たちのためとか、各地の様子とか、いろいろなものを合わせて作られたもので、あまり多くはありません。元に戻って実践の話が続けます。

(1) 多種の課程モデルの採用。ここに一応課程モデルと書いてありますが、本当はモデルでもいいし、英語のアプローチとかプロジェクトとも言えると思います。

80年代の課程モデルは、単科課程モデルのほうが多いです。つまり、旧ソ連の影響を受けて、科目に分けて授業を行っていたわけです。知識をタイプ分けすることを強調し、中で系統的な文化・科学の知識、授業科目の社会的効率を重視するということです。この単科課程モデルがあまりよくないので、80年代に

南京師範大学の趙教授が総合教育課程モデルを提唱しました。

90年代からいろいろな新しいモデルも入ってきましたが、Reggio Emilia とモンテッソーリのイタリアからのモデルが入ってきました。叙事性整合課程はアメリカのある専門家のものが入ってきて作ったものです。あといろいろありますが、主にはこの課程モデルです。

(2) 民間幼児教育の発展。いろいろな理由がありますが、一番大きな発展の理由は経済的に発展してきたことだと思います。数字から見ると、1991年は幼稚園は幼児教育でいうとまだ7%ですが、2001年の時には40%になっています。しかし、まだ民間幼児教育にはいろいろな問題があります。

(3) 幼児教育の研究活動の勃興。幼児教育の研究活動というのは、主に幼稚園の中での研究活動を指します。主な研究成果はいろいろあります。

・課題について、少し詳しく説明していきたいと思いますが、これはあくまでも個人的な意見です。

1. 幼児教育を重視する必要性。先ほども申し上げましたが、政府が幼児教育を重要視してきましたが、まだ十分ではありません。学术界もかなり幼児教育を軽蔑しています。例えば今、中国の教育界の中で一番上の雑誌は教育研究です。その雑誌は3年から5年、幼児教育の論文を載せていません。華東師範大学は幼児教育がとても強いのですが、自然科学編、哲学科学編、教育科学編と3つある紀要でも、3年から5年の間、幼児教育の論文を載せていません。

では、先生たちはどこに論文を出したらいいのでしょうか。学前教育研究という中国の学前教育研究会の雑誌の中に載せるか、幼児教育という中国の浙江省の幼児教育の雑誌、中国で一番売れる雑誌だといわれているものに載せるか。しかし、幼児教育には2ページくらいで1つの論文とか、枚数規定があります。これは確実ではあるのですが、3枚くらいであまり長い論文は載せません。これが学术界の現状です。

実践の中でも、幼稚園の先生はほかの学校の先生と比べるとかなり地位が低いです。例えば学前クラスの先生たちは小学校にいますが、その校長先生はいつも弱い先生、例えば体力の弱い先生、あまり教えられない先生を学前クラスに配置します。

これからも幼児教育は重視する必要性があります。私たち幼児教育を行っている人々が呼びかけることもあるし、政府がこれから幼児教育を重視する必要性もあると思っています。

2 番目として国際化と中国化の問題ですが、前も申し上げたように、中国は今までは西洋のものから入って、いろいろな勉強をして応用してきました。でも、中国自身の幼児教育の発展にふさわしい道を探す必要があると私は思います。私たちもそのために頑張ってきましたが、まだまだ足りません。それについては研究者と政府と幼稚園の先生たち、3つの力を合わせて頑張るべきだと思っています。

3つ目は各地の発展の不均衡を解決するということです。中国はとても広いので、いろいろなところで発展の段階が違います。私は2001年に博士課程に通うために浙江省の省都の杭州に行きましたが、その幼稚園を見てびっくりしました。その幼稚園はすごくいい幼稚園で、1クラス15人が20人でしたが、1カ月の月謝は800元とすごく高いものでした。昆明の場合は300元でしたから2倍以上です。それを見てびっくりしました。浙江省の温州というところでは、民間幼稚園がもう90%に達しています。それはすごく経済的にいいところなのですが、でも政府と真ん中の省はあまり発展していないという状態です。

いま写真をお見せしますが、同じ雲南省でも結構違いがあります。今、昆明のある幼稚園の写真を見せます。昆明から100キロくらいのところ、車で3時間ほどで着くところの写真と比較して見せます。

これは幼稚園の正門のところですが、大通りに面したところです。その幼稚園のトイレ、幼稚園の園内です。何かいろいろ書いてありますが、教室の外の係です。これは教室の中です。子どもがご飯を食べるところです。外で、体操する前のところです。これは水を飲んでいるところです。

もう一つ、これは小学校ですが、学前クラスも入っています。外にある野菜は子どもたちが植えたもので、これを食べるわけです。これはすごいです。農村は遠いですから、毎日帰ることができないので、ここに泊まります。下のベッドには子どもが3人寝ていて、上は危ないから2人寝ています。これは食事を終えてから、お茶碗を並べているところです。これは外で、田舎の子たちです。

これはもう一つのところで、子どもたちはいろいろ入ってますが、学前クラスの子もかどわかかわかりません。これは道路が不便で、雨が降ったら車でもすぐ行けないという状態です。

これはもう一つ、田舎ですけども。これはかなりいい小学校ですけども、これはもう一つの小学校です。教室です。昼間はここで勉強して、夜教室の中に寝るということです。これも同じです。ここは中は先生が寝ているところで、外は事務室です。

これはもう一つのところですけども、教室です。後ろは倉庫になっています。これは火をつけるものです。これは食堂です。こちらはジャガイモしかないところで、お昼と夜は子どもたちはジャガイモばかりを食べています。

これは雲南省の状況で、大きな違いがあると思います。先ほどの各地の発展の不均衡の1つの例として見せました。私が90年にある村に行った時、大きな教室の中に70人もの子どもいましたが、その70人のいる教室はボロボロで窓が1つしかありませんでした。それを見て、子どもたちはどうやって本が見えるのかと思いました。私が村の上の人だったら、学前クラスを辞めたほうがいいのではないかと思い、涙まで出てきました。先ほどの写真は2003年の写真ですが、本当の現場に行って涙が出てきました。

中国の場合はやはりいま義務教育さえ完全にできない状態で、まだまだだと思っております。

でも、私は雲南省の人間として、これから農村の幼児教育の発展のために、1人の研究者として頑張っていきたいと思っております。ご清聴ありがとうございました。

(内田) 曹先生、ありがとうございました。幼児教育の研究者として、地域格差を何とか是正していきたい、力を尽くしていきたいという心強い表明を私どもも感銘深く聞かせていただきました。私は1998年に、残念ながら三足鼎立の中のだげではなかったのですが、華中師範大学の大学院に集中講義に行ったことがあります。3大ストープの1つである武漢市ですが、その700ある幼稚園のうち3つの幼稚園を見せていただきました。華中師範大学の付属幼稚園、1000人の子ども、2歳から5歳半までがそこで暮らしていましたが、そこでの教育内容は圧力釜方式で日本語、漢文、英語をギュウギュウと教えられているような状況でした。80人の教師のうち10人が高級教師ということで、4年制大学の出身者でありました。中国の目標としては、5年後に幼児教育の教員は全員4年制大学出身者に切り換えていきたいと、学長が幼児教育課目の主任とともにおっしゃっていましたが、やはり今のお話を伺ってお写真を見せて拝見しながら、地域格差が非常に大きいんだということを思いました。

私どもの拠点も、まさにさまざまな格差のあるところで、私たち研究者がどういう形で協力ができるか。いろいろとこれから連携をとりながら、曹先生と一緒にこれからの私どもの課題を実現していきたいと思

いました。

それでは一応講演3つをこれで終わらせて、これから休憩を20分とります。飲み物を用意しておりますので、どうぞお休みください。また、3人の先生の講演に対するご質問、ご意見がございましたら、箱が用意しておりますので、箱に入れていただければと思います。それでは休憩に入らせていただきます。

### **質疑応答**

(内田) 指定討論は最初に幼児教育の観点からということで、白梅学園短期大学学長で本学の客員教授でいらっしゃる無藤隆先生からお願いいたします。